

それから美優と付き合い始めて、もう3ヶ月が経とうとしていた。

季節はもう夏である。

周りのみんなは海水浴やキャンプに出かけるようになり、また就職活動にも余念が無い仲間もいる。

で、ボクの就職はなんとかなりそうだ。

今のバイト先で、上司が人事部と取り合ってくれて、就職させてもらえそうなのだ。

となると、いろいろと余裕が出てくる。

もちろん金銭面ではあまり余裕がないけど。

そうそう、この3ヶ月の間に、いろいろと美優のことを聞いた。

美優は物心付く前から施設で育ってきたらしい。

小学校に入る少し前に、養子に貰われていったそうだ。

そこで苗字が吉村になったとのこと。

それまでの苗字は忘れてしまったらしく、ホントに思い出せないらしい。

その吉村の家は、なかなかお金持ちだったらしく、美優自身が色々習い事をしたり、年に数回はパーティなどに出席したりしたらしい。

しかし美優が高校2年生のときに、吉村の父親が経営していた会社が倒産してしまい、それからはかなり酷い生活だったという。

高校も中退し、かわりに通信教育で大検を受け、そして合格し、T服飾専門学校に半年だけ通っていたらしい。

その酷い生活の事は話したくないのか聞かされていないが、美優が時々見せる鋭い目と、粘り強さがその辺を感じ取ることが出来る。

美優はすでに中学生の頃からファッションデザイナーの勉強を独学で行っており、高校在学中や、高校中退後、専門学校在学中、そして退学後も続けてきていて、春先でのコンテスト受賞が初めての成果だったとのこと。

その取材の席でボクと出会い、そしてその後の偶然の再会により、ボクと付き合うこととなった。

まだあまり彼女のことは知らないが、でも彼女の過去にこだわっても仕方が無いし、お互い今は目標に向けてがんばっている最中なので、お互いに励ましあったりして、とても楽しい時間を過ごしていた。

お互いにバイトをしているため、会うのは週に2、3回ぐらいだが、それぞれ一人暮らしをしているので、通い合ったり、時には出かけたりと、お互いの距離感も良く、そしていつもお互いを思い合っている、とてもいい関係になっていた。

ボクは出版社で色々な雑用の最中に、ファッション関係の情報をまとめたり、最近のトレンドを研究したりしているし、美優はブティックで新作の服などに触れたり、そして自分の制作活動なども行い、あらゆる意味で充実した日々を送っていた。

時には親友のトシや、ミュキの親友であるアイちゃんとも、美優を含めて会ったりして、恋愛抜きでの楽しい時間も過ごせているのだ。

今がボクにとって最高の時かもしれない。

そう、ホントにこの時がある意味最高だったであろう。

彼女はこうやって、自分のことを色々話してくれる。

こんなに突発的な付き合い方だったのに。

それだけは今でも引っかかっている。

なんで、いきなりココまでボクを信用してくれるのだろうと。

美優に直接聞こうかとも思うが、今のいい関係を壊したくなかったし、あまり干渉や詮索もしたくなかった。

こうやって、お互いに楽しく続けて行ければいいと思ったから。

さて、今日はバイトも休み、ゼミも無い。

ちなみに明日はボクの誕生日！

きっと美優は、ボクに手の込んだプレゼントをしてくれるであろう。

先日なにかを作るための材料らしき物体を密かに確認したのである。

衣類であろう…恐らく手作りの服。

勝手に誕生日が楽しみになってきていた。

そして誕生日前に色々やれることをやっておけばいいのだが、実は全然やる事が無い。

…暇だ。

美優はちょうどこれからバイトだし。

トシは暇かな？

「暇だから構ってくれ」というメールしてみよう。

…30秒後。

…♪

トシからメールが来たらしい。

「女といるから無理ー。」

とのこと。

うへん…タイミングが悪い。

こういう暇なときに限って、構ってくれる人がいないことが多いのはなぜだろう？

こういっことは、かなり前からよくあるのだ。

ツイてないというか、なんというか…

うへん…困った。

お金も無いから、お茶とおしゃべりで済ませられれば一番いいんだけどな…。

いつもはあまり単独で誘ったりしないけど…アイちゃんと遊ぼうかな？

もしOKだったら、美優にもアイちゃんに会うことを連絡しておかないと。

ということで、今度はアイちゃんにメールしてみた。

…15秒後。

…♪

「何したの～？3時ぐらいからなら空いてるよ！」

やった！

なんとか夕方近くからは時間が潰せそうだ。

ということで、待ち合わせなどのメールのやり取りを済ませた。

午後3時に、S女子短大の門の前と…。

アイちゃんはこの短大の2年生なのだ。

ミュキとは中学校からの付き合いだったらしい。

ボクがミュキのことで相談に乗ってもらったりと、地味に色々とお世話になっている。

今となっては、親友のようなものである。

美優に「他の女の子と遊ぶ」と言えば、かなりのやきもちを焼いてくれるのであるが、アイちゃんの場合はお互いに打ち解けているせいもあり、ボクとアイちゃん二人だけで会うということになっても、あまりやきもちを焼かない。

今は午後1時30分になろうとしている。

そろそろちゃんと出かける準備をしたほうがいよいよだ。

S女子短大は、ボクのアパートからだど街の反対側にあり、結構距離があるのだ。

しかも僕自身の身なりが、ほとんど寝起きの状態なため、シャワーを浴びる必要もあった。

いくら仲良しなアイちゃんに会うとは言え、身だしなみは大事である。

ボクはシャワーを浴び、服を着て、髪をセットした。

時間は午後2時になろうとしているところ。

うん、いいペースで準備できた。

戸締りのチェックをして、出発することにした。

駐車場に置いてある車に乗り込み、キーを捻った。

クククク…ブーン。

シートベルトを締めて、ちょっと距離のあるS女子短大へと車を走らせた。

今はまだ2時ちょっと前。

途中でコンビニでも寄って時間調整はしたほうがいいかな？

いくら遠いとはいえ、車で40分ぐらいの距離である。

コンビニに寄って軽くホンの立ち読みをするぐらいの時間は出来るであろう。

特別急いでもないないので、法定速度きっちりの安全運転で走行していた。

…30分後。

ボンネットから煙が！？

そういえば、先ほどからエンジンのパワーが無いような？

ふと水温計を見ると、針が「H」のところを振り切っている！

これがオーバーヒートってヤツ！？

うわぁ…どうしょ…

ふと周りを見ると、ちょうどいいところにホームセンターがあった。

あわてるように、ホームセンターへ車を走らせた。

駐車場で車を止めて、あわててエンジンを止めた。

ボンネットが異様に熱く感じる。

駐車場でボンネットを開けてみる。

ぼわっと煙？湯気？が立ちのぼった。

うわぁ…ダメかな…

冷却水のタンクを見ると、空っぽだった。

ラジエターのキャップも空けてみる。

「あちっ！！」

キャップを外したと同時に、熱された冷却水が噴き出してきた。

右手を軽くやけどしてしまった。

「くそ〜…あちい〜…」

改めてラジエターの中を見ると、液体らしき物が見えない…。

どうも冷却水が無いみたいだ。

ここはちょうどホームセンター。

ホームセンターでは大概、日用雑貨から、DIY用の資材、電化製品やカー用品まで置いてあるのだ。

これは不幸中の幸い、冷却水を買って、ラジエターとタンクに注入してやろう。

財布の中身は…約7000円。

…仕方が無い…少し心許ないけど、緊急事態だ。

すぐに冷却水の2リットルタンクを買ってきて、タンクとラジエターに冷却水を入れてみた。

そしてエンジンを掛けようとキーを捻った。

ククククク…ククククク…

！

エンジンが掛からない！？

そんなはずは無いだろう…さっきまで元気に走っていたんだから。

改めてキーを捻った。

ククククク…ククククク…キュ…キュ…キュキュ…

あ、なんとなくエンジン掛かりそう！

…キュキュキュキュキュブォーン！

掛かった！

ォーン…ブスッ。

「え？」

エンジンが掛かったと思ったら、すぐに止まってしまった。

改めてクランキングしてみるも、今度は全然エンジンが掛からなくなってしまった。

「どうしよう…困った…」

とりあえず、アイちゃんに遅れる旨のメールをしておこう。

そしてお世話になっている整備工場に電話した。

…どうもエンジンが壊れたらしい。

整備工場の人が言うには。

オーバーヒートになったあと、エンジン止めたのが原因だそうだ。

オーバーヒートになったときには、速やかに停車して、エンジンを止めずに、ボンネットを開けてアイドリングのまま水温が下がるのを待たなければいけないらしい。

エンジンを止めると、冷却水が回らなくなるので、余計にエンジンが熱されて、エンジンの部品が熱で歪んでエンジンが掛からなくなるそうだ。

…大変なことになった…。

これから整備工場のほうで代車を持ってきてくれるということなので、とりあえずはなんとかなるけど…。

今日帰ってから、親に報告だ。

今日はツイてない。

今日はツイてない日なのだろうか？

つい先ほどアイちゃんからメールが来た。

「ごめん…急に別の用事が出来たから、今日のごめんなさいm()m」

とのこと。

恐らくアイちゃんの事だ。

男がらみであろう。

仕方がない…緊急事態にまで付き合ってもらうの気が引けるし、そもそもボクの暇つぶしのために付き合ってもらっただけだったし。

それから30分ぐらいしてから、整備工場の人が搬送車でやってきた。

おそらく大事になっているだろう一言いい、代車を置いていってくれた。

これがまた皮肉なことに、ボクの車と全く一緒。

ボクの車はおさがりと言うこともあり、もう15年ぐらい前の車なのだ。

乗って帰る途中に同じようになったりして…。

まだ帰ってご飯を食べるには早い時間だし、特別どこに行くっていう目的も無かったので、軽く市内をドライブすることにした。

…やっぱり自分の車とは違う。

…代車の方がポンコツだ。

車種が同じだからと安心していたが、時間が経つにつれて運転したくなくなってきた。

エアコンは付いてないし、オーディオもAMラジオだけ。

窓は手で一生懸命グルグルと開けなくてはいけないし、そして排気管が壊れているのか、若干うるさくも感じる。

ぐるっと市内を回ってから買い物に行くつもりであったが、すぐに買い物に向かうことにした。

いつもの行きつけのコンビニに寄って、晩御飯とジュースを買い、自宅へと向かった。

いろいろ考え事しながら運転しているうちに駐車場に到着。

少ない荷物をもって、自宅へと向かった。

あ〜あ…今日はなんていう日なんだろう…まだ5時前だよ…グスン。

自宅のドアを開けて、そそくさと部屋に入った。

ああ…今日はついてない…ついてない日だったな…。

折角の休みなのに車は壊れるは、あいちゃんとは遊べなくなるは…はあ…

仕方がないからご飯でも食べて、ゲームでもやって、美優にメールでもして寝てしまおう。

ボクは先ほど買ってきたコンビニ弁当を袋から取り出し、食べようとした。

ピンポン

ん、誰だろう？

こんな時間に来客とは珍しい。

トシが暇つぶしにでもやってきたかな？

「はい。」

ボクはドアののぞき窓を覗いてみた。

…僕は目を疑った。

…ミュキのお母さんだ。このヒステリックな女性を間違はずが無い。

な、なんでミュキのお母さんが！？

日本に帰ってきていた？

しかもなんで僕の部屋を知っている？

きつとなにかが…なにかが起こる？

ボクはちょっと不安ながらもドアを開けた。

「カスガさん、お久しぶりですね。」

ミュキのお母さんは、ボクの顔を見るなりそう言った。

「…ミュキのお母さん…ですよ？」

なぜかボクは、おどおどしたように訊いてしまった。

なにか嫌な予感がしていた。

「どうぞ、上がってください。」

「いえ、ここでいいです。」

…さらに嫌な予感が…何を言おうとしているのであろう…

「お母さん…よくボクの部屋の住所わかりましたね。」

「ええ、当時のミュキの住所録は全て控えさせて頂いておりますので。」

…うん、間違いない。

ミュキのお母さんだ。

このチェックの厳しさ…正真正銘のミュキのお母さんということで断定。

と、いきなり強い口調で、ミュキのお母さんが問いかけてきた。

「カスガさん、今はお付き合いしている女性がいますそうで。」

…！

その言葉にはいかにも棘があった。

どこかで情報を聞いたのであろうか？…どうやって！？

「は、はい…。で、でも決してミュキさんのことを…」

ミュキのお母さんは、僕が話し終わる前に割り込んできた。

「なんでもミュキよりも美人な女性ですってね。」

…！

何を言ってるんだ！？

さすがにカチンと来た。

が、ここは抑えて…抑えて…

「美人って言うか…ミュキに似てる娘なんですけど…やっぱり似ている人って言うか…」

ミュキのお母さんは、ちょっとビックリした顔をしていた。

…その後少し無言。

すると、後ろからドタドタ足音が聞こえてきた。

「ちょっと！なにやってんの！？」

女性の声だ。

ミュキのお母さんは慌てて「し、失礼します！」

と言って、ドアを閉めて出て行ってしまった。

そして二人分の足音が遠ざかっていった。

ボクはわけがわからず、少しぼーっとしていたが、急に我に返り彼女達を追おうと表に出た。

しかし既に二人の姿はなく、また車などもなかった。

さっきの声…やっぱり美優っぽく聴こえた。

たぶん美優だ。

でも今日はまだバイトのはず…棚卸しがあるとかが言ってたし。

美優のバイト先の棚卸しの日は、いつも終わるのが遅い。

夜中の12時を越えることも珍しくないのだ。

今の時刻は、午後8時過ぎ。

さすがにまだバイト中な筈である。

…もしかしてミュキ！？

そんな筈はない…去年の春にミュキは「僕の手の届かないところ」に行ったはずだ。

でも、ミュキのお母さん、なんでボクの部屋に来たのだろう？

その前に、なんでボクの部屋の住所がわかったのだろう？

いやいや…それはミュキのお母さんが住所を控えてあるって言ってたじゃないか。

考えれば考えるほどわからなくなってきた。

ホントにミュキのお母さんの目的が知りたい。

そして、あの時間こえた、美優っぽい声が誰だったのかも。

う〜混乱してきた…

そういえばおなかが空いてたんだっけ…きっと血糖値が低いから混乱してるんだ…。

とりあえず、先ほど食べ損ねた晩御飯を食べることにした。

あ〜あ…まだ暖かかったのに、もう完全に冷めてしまった。

暖めなおすのも電気代がもったいないので、そのまま食べることにしよう。

しかもよりもよって、冷めていると異様に不味い「やきそば&お好み焼き弁当」…しかたがない…。

パクッ…

…やっぱり不味い…失敗した…塩カルビ丼とかにしておけばよかったな…。

さ、TVでも点けようか…

！

と、思ったその時に、携帯電話が鳴った。

メールだ。

美優からの。

美優だけ着信音を変えているので、電話を見なくても誰から来たのかわかる。

なぜだか妙にドキドキした。

先ほど考えていたことが、また頭の中をよぎった。

ボクはドキドキしながら、携帯電話を開いた。

「今からカスガの部屋に向かいます。」

…この短くて丁寧な書き方が…さらに不安を…

って、いつものことだけど…なぜか…

このままではいけないってなぜか思った。

…なにかいけない？

あああ…ボクは混乱しているんだ…

ここは美優に甘えさせてもらおう。

メールを返信…「早く来て！美優に甘えたいから！」

…なんて、バカなメール打ってしまったではないか。

ホントにボクはおかしくなってしまうらしい。

ホント…なにを考えてるんだろう…。

ピンポーン

え、もう美優来たのか！？

ボクは確認もせずにドアを開けた。

ドカッ！

ドサッ！

なんとドアが人にぶつかってしまったらしい。

ふと廊下を見回すと…

なんとアイちゃんだ！

ドアの向こう側にアイちゃんが倒れこんでいた。

そのアイちゃんは痛そうに頭を抑え呻きながら、ゆっくりと立ち上がった。

「ご、ごめん…だ、大丈夫？」

「イッター…」

アイちゃん、ホントに痛そうだ…。

「ご、ごめん、アイちゃん…ちょっとおでこ見せて。」

「うん…」

あああ…おでこに傷が付いてしまった…血が出ている。

でも、バンソウコウで何とかなりそうだ。

「アイちゃん、とりあえず中入って。バンソウコウ貼ってあげるよ。」

と、とりあえずアイちゃんを部屋に入れた。

…バンソウコウ…ばんそうこう…バンソウコウ…確かこの辺に…

…あった！

「アイちゃん、ちょっと前髪上げて押さえといてくれる？」

あああ…女の子の顔に傷つけちゃったよ…ちょっとショック…。

しかも、こんなにかわいい顔のアイちゃんの顔だ…ごめんね、アイちゃん…。

アイちゃんはそれくらいかわいい顔をしている。

決して芸能人やモデルのような顔をしているわけではないのだが、やや童顔でいたずらっぽい顔をしているのが、ボクとして…というより、アイちゃんを知っている男性はみなそう思うであろうというかわいさである。

そのアイちゃんの額にバンソウコウを貼ろうとした時に…。

ガチャッ…

ドアの開く音が聞こえた。

ふとドアのほうを見ると、そこには美優が立っていた。

そしてその表情は…怒ってる！？

その右手には、見慣れないポーチを持って。

「なにやってんの…」

恐らく美優から見れば、かなりいただけない様子に見えたのだろう。

なにせアイちゃんとボクが向かい合って、異様に接近して、ボクがアイちゃんの額に手を伸ばそうとしているところ…

アングルが悪ければ…じゃない、アングルが違えば、ボクとアイちゃんがこれからキスでもしようかという風に見えたかもしれない。

で、今の二人の状態は…

二人して固まって、美優を見ている状態。

しかも結構マヌケな格好で。

そして美優は怒ってる。

…とりあえず何か言わなければ…。

…いや、別にアヤしくないぞ…ここは堂々と。

ということで、「ちょっと待って。」と美優に話した。

そして手にしたバンソウコウを、アイちゃんの額に貼り付けた。

で、ボクは堂々と(?)美優に話した。

「バンソウコウ貼ってあげてただけど？」

ここで5秒間の沈黙。

まだ空気が重たい。

そこでアイちゃんが口を開いた。

「ちょっとカスガくに相談あって、ついさっき来たばかりで、でもタイミングが悪くて…」

「た、タイミングって何！？」

あああああ…これって泥沼ってやつですか…。

アイちゃん、あわててそんな事言わなくても…。

「そうじゃなくて、チャイム鳴ったから、ドアを開けるじゃない。そしたらちょうどアイちゃんがドアの前に立っていたから、アイちゃんにドアが激突して、で、こんな感じさ。」

ボクは出来るだけ冷静に、美優に説明した。

なぜか冷や汗流して。

「み、美優！？」

ボクが声を掛けたとたん、美優の顔がキツとなって、ドアを思いっきり閉めて出て行ってしまった。

マ、マズイ！

ボクはすぐ傍にいるアイちゃんと向かい合った。

「お、追いかちなよ…。」

さすがにアイちゃんもおどおどと気落ちしている。

「そ、そうだね…。」

あまりの美優の剣幕な様子に、二人とも驚いてしまっていた。

ここまで美優が激怒したのを見たのは初めてだった。

それはアイちゃんもそうだったのであろう。

ボクはアイちゃんに部屋で待てるように話し、部屋を出て美優を追いかけた。

…

どこにいったのであろう？

というより、どうやって部屋までやってきたのであろう？

タクシー？

それともバス？

今何時だろう？

腕時計を見ると、22時38分。

まだバスはある時間だ。

とりあえずバス停に向かった。

ボクの部屋からバス停までは結構距離がある。

歩いて15分は掛かるのだ。

それはボクが車を持っているのと、家賃の安い部屋を探していたためこうなったのであるが、でも普段あまり歩いてい

ないボクにとって、この距離は結構キツイものがあった。

〈そお…こういうときに自転車が欲しいな…

途中までは走っていたものの、約3分後には歩きが変わっていた。

…わき腹が痛くなってきた。

でももう少しでバス停だ。

そこの大通りがもう見えている。

…

とその時、バスが大通りを走っていった。

マ、マズイ！？

ボクは痛いわき腹を押さえながら、駆け出した。

もう少しでバス停…もう少しだ…。

その角を曲がって…

…ブェン！

ちょうど目の前にバス停が見えたところで、バスが発車してしまった。

もちろん人は、バスを降りたであろう人たちしかいなく、美優の姿はどこにも見えなかった。

クソっ…

…！

あ、携帯！

美優に電話しよう！

ボクはポケットに手を伸ばした。

…

が、ポケットの中に携帯電話は無かった。

しまった…家に置いてきてしまっている…。

ボクは息を切らし、その場でかがんでしゃがみこんでしまった。

そして数分後、ボクはトボトボと自分の部屋に向かって歩きはじめた。

ボクは20分掛けて、のんびりと歩いて部屋の前まで帰ってきた。

部屋のドアを開けると、アイちゃんが座ってテレビを見ていた。

そうだった。

部屋にアイちゃんを待たせて部屋を出たんだった。

はぁ…。

ボクはかなり気落ちしているらしい。

アイちゃんはボクに気づいて、こちらを見ている。

美優に追いつけなかったことは、見て百も承知であろう。

ボクは靴を脱いで、部屋に入った。

そうだ、携帯どこだろ！？

ふと目の前にあるテーブルに、ちゃんと携帯が置いてあるじゃないか。

ボクは美優に電話してみた。

…

...

P————…P————…P————…

ダメだ…話し中だ…

どこに電話してるのだろう？

仕方がない…メールでも送っておこう…。

ボクはちゃんと話をしたいということを書いて、美優の携帯にメールした。

はぁ…

今日はなんていう日なんだろう…。

「か、カスガくん…」

すぐ横からアイちゃんが声をかけてきた。

ボクのことを心配に思ったのであろう。

美優が飛び出していった原因…アイちゃんが部屋にいたから…

...

いや、アイちゃんは悪くない…タイミングが悪かっただけ…

はぁ…

ホント、ため息しか出ないや…。

...

アイちゃんも黙って座っている。

下を向いて。

そんなアイちゃんを見ていたら、アイちゃんのことが気の毒になってきた。

「アイちゃん…だ、大丈夫？」

「…うん。…私はいいんだけど…」

...

しばし無言。

って、そういえば、アイちゃんがボクのところに来た用事って…なんだったっけ？

「そういえばアイちゃん、ボクに用があったんじゃないかなったっけ？」

「え、う、うん。そうなんだけど…ってというか、ホントに凄いことなんだけど…なんだか言いにくくて。」

え、なんだろう？

気になるな…。

「え、何？ボクに話しにくいことなの？」

...

ボクに話しにくいこと？

ま、まさか…

アイちゃん、ボクに愛の告白をしようとしてるんじゃない？

…

そんな事あるわけがない。

…

アイちゃんはなぜか重たそうな口を開いた。

「ビックリしないでね？」

…ゴクッ。

「う、うん」

ボクはどうしたらいいかわからないけど、とりあえず覚悟した。

「今日ミュキのお母さんに逢わなかった？」

！

「逢った！っていうか、さっき部屋に来たんだよ！」

「やっぱり帰ってきてたんだ…」

アイちゃん…なにか知っている？

ボクは今までに無いような…雰囲気？

それも嫌な物を感じていた。

どういふことなんだよ…アイちゃん…

それからアイちゃんはうつむいて、少し黙っていた。

いかにも、話しにくいことを言おうとしているみたいだ。

「実はね…」

…アイちゃんはゆっくり口を開いた。

「ミュキは生きているの。日本で」

！

…ボクは自分の耳を疑った。